



R8 全国学力・学習状況調査 上越地区の結果分析から見る 「これからの授業改善の視点」

「分かったつもり」の打破と「根拠をもって表現する力」の育成

令和8年度全国学力・学習状況調査の分析から、上越地区の児童生徒の「現状と課題」が明らかになりました。それを踏まえて、授業改善の重点等を示します。各校・各学級での授業づくりにご活用ください。

1. データから見た上越地区の児童生徒の現状と課題

【授業の成果】

・「授業の内容がよく分かる」と答える児童生徒は 小学校で7～8割、中学校で7割超と高い水準を維持している。（県・全国公立平均と比較しても同等以上の高水準）

授業内容の理解への満足度が高く、次の学習への意欲につながる授業を実施していることが分かる。

児童生徒は、分かったつもり
なのだけれど…

【直面している課題（校種別）】

【小中共通】

・「授業が分かる」という実感は育まれているが、全教科で、平均正答率は全国・県を有意に下回っている。

【小学校】国語（全国差-5.5pt）の落ち込みが過去最大である。算数では理由や過程の説明で計算結果のみを書く傾向がある。

【中学校】数学（全国差-5.8pt）および英語（IRT 全国差-35pt）の落ち込みが大きい。また、記述式・口述式の無解答率が高い。



2. 明日からの授業改善 3つの具体的アクション（小中共通取組 例）

【アクション①】 全員が「説明できた・書けた！」を実感する相互アウトプットの徹底

1. 一部の児童生徒の発表で終わらず、「全員が話す」ペアワーク（交互説明・1分間要約スピーチ）を毎時間設定する。
2. 話した内容（理由・根拠）をそのまま「キーワードを含む文章」でノートに残す活動をセットにし、「話す→書く」を直結させる。

【背景となる結果】「説明する活動」：教師の実施率95%に対し、児童生徒の活動実感は63～64%と差が開く。記述式・口述式の無解答率が高い。

【アクション②】 無解答を防ぐ！「別解・途中経過・根拠」の可視化と試行錯誤の推奨

1. 正解（結論）だけでなく、「どう考えたか」「どの図や条件を使ったか」の途中プロセス・別解を書くことを日常的に評価する。
2. 「分かっていること・図・式・キーワードだけでもまず書く」指導を徹底し、白紙（無解答）をゼロにする粘り強い問題解決姿勢を育てる。



【背景となる結果】「あきらめずにいろいろな方法を考えた」児童生徒は正答率が大幅に高く（小+18.4pt/中+16.7pt）、無解答率が低い。算数・数学で計算結果のみを書く傾向や無解答率が高い。

【アクション③】知識・技能を活用する「問い(身近な課題・探究的な場面)」の推奨

1. 授業のまとめや単元末に、既習事項を活用して身近な問題や複数資料を読み解く課題を設定する。
2. 条件作文や理由説明、即興スピーキングなどの、筋道立てて表現・説明する活動を単元計画に位置付ける。

【背景となる結果】上越管内の児童生徒は基礎的な「知識・技能」に比べ、記述や説明を伴う「思考力、判断力、表現力等」において全国との差が大きい。

3. 校種別・教科別 授業改善の重点ポイント 例

上越地区の課題に対する改善策の一例です。参考にしてください。

【小学校 国語】※叙述問題で全国差-10~-15pt、無解答率は15~25%

- ・単元の特性や児童の発達段階に応じて、叙述や資料から言葉を引用する言語活動を設定する。根拠を明示して話したり書いたりできるような思考の型を段階的に指導する。
- ・読解力を育むため、単元末に文章全体を要約する活動を位置付ける。



【小学校 算数】※正しい答えの数値は出せているものの、十分な理由や過程の説明が書けない傾向あり。

- ・計算結果を出すだけでなく、「どうしてその式になるのか」「どの条件を根拠にしたのか」を言葉や図、式を使って筋道立てて説明する活動を導入する。

【中学校 国語】※複数資料を比較した提案理由の条件作文で全国差 -8~-14pt、無解答率は約 20%

- ・読み深める場面において、複数の資料（文章・図表・グラフ等）を比較・関連付け、叙述やデータを根拠として自分の考えや提案理由をプレゼンテーションスライドにまとめ、発表する活動を導入する。

【中学校 数学】※図形・関数・データの活用領域で全国を大きく下回る。記述式正答率は全国差-10pt、無解答率は約 35%

- ・証明問題や関数の文章題において、生徒一人一人が解決の方針を立てられるようにするために、すぐに問題を解き始めるのではなく、問題文の情報を図・表・式などに整理し、対話を通して解決の見通しを共有する活動を導入する。

【中学校 英語】※「話すこと」の無解答率は4技能の中で最大。ICT等を使い、音声に関わる家庭学習の頻度で有意差あり。

- ・「話すこと [やり取り]」において、即興的に話す言語活動を帯活動に設定する。小中共に文発話を意識し、知識・技能の向上を図る。ICT も活用し、音声に関わる家庭学習を習慣化する。

4. 学びを支える「生活習慣・読書・自学自習」の呼びかけ（クロス集計の有意差より）

- ① 1日30分以上の読書習慣は思考・表現力の土台。👉（全教科で +10pt 超）
- ② 自学自習の定着は、思考・判断・表現の土台。👉（全教科で記述式問題の無解答率が、半減）
- ③ 家庭での対話の有無も、学力との相関が認められた。👉（全教科で +9.5~11.1pt）
- ④ 朝食欠食が認知機能・集中力・学力形成に与える影響は全要因中最大。👉（差が最大 30pt）
- ⑤ 平日4時間以上のメディア利用は学力低下を招く。👉（全教科にわたり -16~-17pt）

改めて、学びを支える家庭での習慣づけと学力には、強い相関関係があることが分かります。『生活習慣と学習の質』の両面から、ご家庭と連携して児童生徒を支援していく際の参考資料として、学年だよりや保護者会などでご活用ください。